２００４年度岩本ゼミ活動報告

吉田 晋也

春合宿（4月1日・2日）

春合宿は淡路島で行った。1泊2日の合宿の中で以下の二冊の本を輪読し、議論をした。

・「人間が幸福になる経済とは何か」　ジョセフ・E・スティグリッツ　徳間書店

・「ESOP 株価資本主義の克服」　本山美彦　シュプリンガー・フェアラーク東京

「人間が幸福になる経済とは何か」では、経済諮問委員として米経済の政策運営に携わってきた著者が、90年代のアメリカの経済をどう解釈すればいいかを示した。彼は規制緩和、ニューエコノミー、財政赤字削減、金融の拡大といった事象の背景にあったのは、市場への過度の信頼とアメリカ金融界の利益追求であると主張する。「ESOP　株価資本主義の克服」では、株式交換等の金融手法を使って実体の伴わない成長企業を多く生み出した株式市場絶対重視の経済のもろさが指摘されたうえで、利害関係者としての労働者と共に発展する企業のあり方が提唱される。

この両方の本から学んだ重要なテーマは「市場にできることと政府がすべきことは何か」ということであったように思う。「市場の失敗」が存在することを理解し政府がそれを補うことが必要であるということ、また政府の過度の介入は市場をゆがめ非効率を生むということを改めて理解することで、市場と政府のバランスという観点に注目できたことは非常に有意義であった。

海に囲まれた気持ちの良い環境で昼は散策等を楽しみ、また夜はおいしく酒を飲めた。合宿の名幹事である柴さんに改めてお礼を言いたい。

前期ゼミ

国際マクロ経済学の理論の学習を行った。今年は正規のゼミの他、問題演習などでゼミの復習を行うサブゼミを実施し、またマクロ経済学・ミクロ経済学を学習する勉強会も有志で行われた。

「ゼミ」

テキストはR.E.ケイブス、J.Aフランケルの『国際経済学入門』（日本経済新聞社）を用い、輪読する形式で進めていった。初めて国際マクロ経済学を学んでいるゼミ生にとって内容が難しいこともあって、ゼミの主眼は内容の理解に置かれていたように思う。一人で考えて分からないことが、先生方や先輩方の解説を通じて分かるようになることは多かったのでその点は良かった。しかし今後更にゼミを充実させるためには、現実の経済事象と関連付けながらテキスト内の理論について議論することも必要であるように感じた。個人的な考えではあるが、新聞記事等をゼミの場に持ち込んでそれを題材にゼミの終わりに少々議論の時間を設ける等の取り組みも意味があると思う。

「サブゼミ」

テキストの各章末にある演習問題を各自が解いてきて、院生の先輩方に助けていただきながら答えあわせをしていった。正規のゼミで議論できないことを議論し、またお互いに分からないことを教え合えた点で充実していた。

「経済学勉強会」

西村君の主催でスティグリッツ経済学シリーズの三冊の本を読み進めた。各章の重要点を確認しながら、その確認のための演習問題を解いていった。経済学の基本を学習することができた他、経済学に関する率直な意見交換ができた点が非常に良かった。今後もこのような取り組みが続けられることを期待している。

夏合宿（9月22日・23日）

夏合宿は城崎温泉に行った。後期に取り上げる「アジア債券市場」に関する基本的な意義や必要性を理解するために、吉富勝の『アジア経済の真実』（東洋経済）を学習した。この本の中では資本収支危機としてのアジア通貨危機のメカニズムが示され、今後危機を繰り返さないためにはアジア各国は中間的金融市場構造を目指さなければならないことが主張されている。アジア債券市場は「域内貯蓄を域内投資へ回す」という文脈の他、中間的市場構造を形成する上でも重要であることを理解することができた。この合宿を通して「直接金融と間接金融のどちらが望ましいか」という重要な視点を身につけられたことは、国際金融を学んでいく上でも非常に大きな財産となった。

今回が二回目の城崎合宿となるゼミ生も皆温泉を堪能した。多くの外湯を精力的に回った人もいた。夜の酒宴はいつになく盛り上がり、宿泊した旅館の別館には岩本ゼミの楽しげな声が深夜まで響いた。

後期ゼミ

後期のゼミでは高崎経済大学とのディベートに向けた準備と論文作成の二つに取り組んだ。効率的に学習を進めるために、後期の中盤からは班を二つに分けてゼミ活動を進めた。

「ディベート」

今年は「今後の中国にとって直接金融と間接金融のどちらが望ましいか」というテーマを設定して、岩本ゼミは直接金融支持の立場をとった。振り返ると、中国四大国有商業銀行の抱える不良債権問題や株式市場での不正の多発等の事象を調査していく中で、直接金融、間接金融それぞれの持つ根本的な性質を比較するといった当初の意図とは研究のあり方も変わっていったように思う。準備段階では分担して、各自が各論点の補強、論理構成を担当した。それぞれが自らの専門分野を責任を持って学習できたことは良い点であった。また中国の独自の金融システムを理解するために、意欲的に英語、中国語の文献をリサーチできたことも一つの成果であった。

ディベートの本番では両校の学生が議論を噛み合わせることを心がけた結果、意味のある議論が展開できた。結果は岩本ゼミの勝利に終わったが、本番の議論の後にも充実した

フリーディスカッションができたことは価値があった。ただ議論のあり方として、中国金融市場の独特の性質を巡る散発的な議論に時間を割かれたことは少し残念であった。直接金融と間接金融という普遍的な問題を正面から見つめ、定性的な分析により時間をかけて議論することができればより良い議論ができていたように思う。

高崎経済大学とのテーマや条件を巡る交渉は今年も遅れがちになりその点は反省すべきであった。ディベートという取り組みの性質上、準備段階での交渉は重要な意味を持つ。今後はなるべく早く交渉を進めて、本番の議論をより厚みのあるものにして欲しい。

「WEST 論文発表会」「四大学論文発表会」

今年初めて参加することになった WEST 論文発表会に向けて「アジア債券市場の育成」をテーマにして研究を進めた。ゼミの時間の多くがディベートの準備に使われる中で、論文班のゼミ生は自らの担当分野を自主的に地道に研究した。論文のリーダーである山本君の尽力もあり、アジア債券市場の必要性、その育成方法に関わる広範な内容をまとめることができた。

ただ内容が多すぎたこと、分担を分けた後は論文班の中での連携が少なかったことがあり、論文としてややまとまりが欠けてしまった側面があることは反省点である。今後の論文作成時にはまず論文の論理構成に多くの時間と労力をかけて、戦略的に作成することが必要になるだろう。また WEST の論文発表会を通じて、他校の優れた点をたくさん見ることができた。パワーポイントを使った効果的なプレゼン、計量モデルを取り入れた定量的な研究手法等は、今後学ぶ点も多いと感じた。

後記

今年一年の岩本ゼミの活動を振り返ると、勉強熱心なゼミ生が多く充実したゼミであったと感じています。三回生は自らの役割に責任を持って取り組み、二回生は三回生を助けながらよくゼミ活動に取り組んでいました。

そして先生と先輩方には大変お世話になりました。先生には理論のことを丁寧に解説いただいた他、後記の研究での文献紹介、論文構成のアドバイス等をしていただき、またゼミ生の結びつきにも心を砕いて、多くの場面でゼミを楽しく、明るいものにしていただきました。先輩方はゼミの時間以外でもゼミ活動に協力していただいて、多くのことを教えてくださいました。本当にありがとうございました。

理論の学習と経済問題の研究の両方にバランスよく取り組み、楽しく、充実した岩本ゼミがこれからもどんどん盛り上がっていくことを期待しています。